

こらっせ便り



2015年4月13日

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008

Eメール : info@korasse-kanagawa.org

「こらっせユース」、檜葉っ子に会いに行く！



公園遊び、最後にみんなで集合写真

「こらっせ」では、子どもたちを神奈川に来てもらうだけでなく、私たちが福島に行こうと去年の5月に「こらっせ交流会」、11月に「ゆずり葉祭」参観、「檜葉町ツアー」をおこない、双方向交流の大切さを認識しました。今年の春休みには学生が主体となって檜葉町の社会福祉協議会が運営する「学童保育」のお手伝いに行きました。学童保育は、いわき市の檜葉町仮設住宅のなかにあるサポートセンター・「空の家」にあります。

3月26-27日は、大町・平戸・山崎さんと事務局スタッフの稲垣さん、3月30-31日は大内・岩成・影浦さんが「学童保育」で子どもたちと目いっぱい遊んできました。また、「檜葉を知ること大事」と社会福祉協議会の松本事務局長が檜葉を案内してくださり、学童保育のスタッフの方が子どもたちの状況をお話してくださったそうです。詳しくは、「こらっせユース」のフレッシュな報告を読んでください。

子どもとの関わりから得られたこと 平戸 萌子



空の家の中で新聞紙じゃんけん。誰が勝ち残ったかな？

私は今回の企画ではじめて被災地を訪れました。主な活動は仮設住宅に隣接するサポートセンター“空の家”にお邪魔して、学童保育のお手伝いをするものでした。行くまではどのように子どもと接するべきかなど不安な気持ちもありましたが、出迎えてくれた子どもの笑顔ですぐにリラックスできました。子ども達と同じ目線で、トランプやピアノ、外で鬼ごっこなどをして遊びました。大学生という立場だからこそ、先生ではなく距離が近いお姉さんのような存在でサポートできたことに満足しています。

空の家訪問で、子どもの様子から仲間の大切さや生きる活力を学んだように思います。1年生から6年生まで20名ほどの子どもが通っており、学年関係なく助け合いながらのびのびと遊んでいました。外で元気に走り回る姿や屋内でも柱をよじ登るアクティブな一面も見られ、遊ぶ環境の大

切さに気付かされました。遊ぶ場があるからこそ子どものやすらぎ、心の成長を与えると改めて実感しました。今回限りではなく、また足を運ぶことで子どもに寄り添いながらサポートする機会を増やしていければと思います。

2日目の午後は“空の家”事務局長の方に檜葉町を案内していただきました。震災後のままだる建物や除染した後のゴミ山などを目の当たりにし、3年以上経った今も現状は難しいことを再確認しました。この貴重な経験から自分に何ができるのか、こらっせとどう向き合うか考えるきっかけにしたいです。

檜葉町を訪問して 山崎 由里恵

震災から4年経過し、道路はきれいに整備されていました。しかし、檜葉町民は昔住んでいた自分の家に居住することは許されておらず、これからの将来が見えない不安の中で暮らしているのではないかと感じる場面がいくつもありました。実際に檜葉町に行くまでわからなかったことを、今回の経験でたくさん勉強させていただきました。

空の家で出会った子どもたちはとても元気いっぱい、みんなで公園を走り回ったり、一緒にご飯を食べたりして楽しい2日間を過ごすことができました。空の家に行くまでは「子どもたちに何かしてあげよう」という気持ちでしたが、実際には、私が2日間を通して子どもたちから大きなパ



四倉町の海沿い、津波の爪痕の残る蔵

ワーをもらっていたような気がします。今回は学童保育の子どもたちと関わるのがメインであったが、これからは子どもたちに限らず、大人の方や高齢者と関わるができる活動も行いたいと思いました。

自分の足で檜葉町を歩き、自分の目で実際の檜葉町の姿を見ることで、テレビの中の世界としてや自分の生活とはかけ離れたものとして捉えるのではなく、現実のものとして受け止める貴重な体験をすることができました。この経験を活かし、私たちにできることを考えていながら、これからの活動に励んでいきたいと思います。最後に、こ

のような機会を与えてくださった多くの関係者の方々に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

肌で感じたこと 大町 奈津美

今回のこらっせユースで学童保育に参加した際、考えさせられた場面が多くありました。子どもたちはとてもわんぱくで、公園を元気に駆け回る姿が印象的でした。こう思うと同時に、今でも仮設住宅暮らしの子どもたちにとって、こうして外で遊ぶことは重要であると改めて考えました。子



檜葉町の高台から見た被災地。除染廃棄物やがれきが



松本事務局長から檜葉町の現状を教えていただきました

子どもが抱えているかもしれない不安、ストレスを解消するためにも遊びは必要不可欠だと、現地の子どもたちと共に遊んで身をもって感じたのです。また、お世話になった空の家の事務局長である松本さんに榎葉町を中心に案内していただいた際には、被災地を初めて目の当たりにして衝撃を受けました。4年たった今でも変わらぬ地を、海岸沿いを臨む高台から見て、現状を知ることの必要性や震災を風化させないことの重要性を強く思いました。今まで私は震災についてテレビなどのメディアを通してしか見たことがありませんでした。このプログラムに参加する前に、震災についてしっかりと考え続けているかと聞かれたら、きっと頷けなかったです。要するに意識は浅はかでした。しかし、今回この活動に関わられたことで意識が変わったと自信を持って言えます。なぜなら実際に出会えた子どもたちの笑顔や高台からの景色が目浮かぶからです。私にとってこのプログラムは貴重な経験でした。



元気なみんなと鬼ごっこ。鬼決めじゃんけん!

こらっせユース始動 岩成 銀河



線から落ちないように移動して、名前順に並ぼう!「隣のチームには負けないぞ??」

3月30日、31日の2日間、空の家の学童保育を訪問し、福島の子どもと交流してきました。いわき市に立ち並ぶ仮設住宅の中にあるサポートセンター空の家。その中で遊ぶ子どもたちは本当に元気いっぱい、通う小学校、学年男女問わず仲良く過ごしていました。

最初は子どもとの間にやや距離を感じましたが、すぐに打ち解けることが出来、空の家に用意されている遊び道具を使った遊びの他にもグリコや馬跳びハイタッチゲームなどを体力の持つ限り(笑)一緒にしました。

2日目には学生企画のレクリエーションもし、私たちだから出来ることを成し遂げられたと思います。お別れの際には子どもたちみんなが玄関までお見送りしに来て、笑顔で「また来てね」と送り出してきてくれました。とても感慨深く、来て良かったと心から感じました。

福島で子どもたちと遊ぶという、夏季に行われるリフレッシュプログラムとはまた違ったりリフレッシュプログラムを行えたかなと思います。

学生主体のこらっせユースとしての初めての試み。この経験を活かし、試行錯誤しながら、今後も学童保育ボランティアを継続して行っていきます。



学生レクの合間の休憩タイム。「次は何のゲームかな?」



榎葉町の仮設住宅を通り空の家へ

子どもたちのパワーの大きさ

影浦 あゆみ



みんな手をつないで公園へ出発!



子どもたちの前でマンモス鬼ごっこの説明

私は、仮設住宅を生で見るのが初めてでした。普通の住宅が並ぶ中突然現れた仮設住宅を見て、今まで震災を遠くのことに感じていただけに仮設住宅の多さなどに衝撃を受けました。

そんな第一印象の後、空の家に行き子どもたちと会うと、また違うことに驚かされました。子どもたちのパワーです。子どもたちは本当に元気いっぱい、室内にもかかわらず走り回る。力が有り余っていて、とにかく遊びたい!というような感じでした。2日目に保育士さんに伺った話によると、普段は人手が足りず外に遊びに行くことができないこともあるそう。放射線が関係しているのではないかと考えていたので、少し安心しました。さらに、子どもとの接し方について聞くと、やはり震災のことは話さないようにしているとのことでした。檜葉町に帰るかどうかということも大人が決めることだし、そもそも低学年の子たちは震災が起こった時はまだ小さかったので、震災のことをあまり覚えていないそうです。子どもたちと接する時には、特別なことを考える必要はなく、彼らが安全に思

いっきり遊べるように気を付けることが第一に大切なのだと学びました。

今回いわきに行って、いろんなものを見たり聞いたりしたことはとても貴重な経験になりました。今回学んだこと、感じたことをこれからの活動に活かしていきたいと思います。

遊びの大切さ 大内 万里

今回、空の家の学童保育に2日間という短い期間ですが参加させていただき、一緒に過ごしている中で子ども達の身体を動かして遊びたいという思いがとても感じられました。

後半組では、学童保育の先生に、子ども達の様子についてお話を伺い、子ども達を見守る人手が足りないため、外で思い切り遊ぶ時間を頻繁に持てる状況ではないことや、学童では子ども達がルールを守りながら思い切り楽しめるような場作りをしているということがわかりました。

震災が生活の背景にはありながらも、それだけではなく今も続いている子ども達の暮らしや、性格や成長による心の動きをふまえて、遊びを通して子ども達との関わりを続けていきたいなと思いました。私たちは今回、福島こども・こらっせ神奈川の事務局の皆様のご支援のもと、実際に神奈川から福島を訪れて、子ども達と遊ぶ機会を持つ事ができました。今後この福島と神奈川の距離がある中で、子ども達がのびのび遊べる環境を提供していく事が出来るのかは、活動の課題であると思います。こらっせの夏のプログラム同様に、長期的な関わりをしていけるように、工夫していきたいです。



みんなで将棋崩し!「イエーイ??」